



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY

一般選抜直前対策講座  
【科目別対策 国語】

2022年12月18日

講師：青木 新吾（代々木ゼミナール）

## 2022年度 京都橘大学 一般選抜直前対策講座 国語（現代文）

### 【傾向】

京都橘大学の一般選抜の国語は、合計4回の試験全てにおいて、現代文（評論）と国語常識の大問4題で構成される。そのすべてにおいて、標準的な学力がいか定着しているかが試されるようになっていく。

文章題については、高校3年生であれば読んだことがある、ないしは、読めるであろうものが出題され、設問は、接続詞、空欄補充、傍線部説明、内容一致など、記述以外の私大客観マーク形式における全てのパターンが用意されている。本文全体を余すところなく問う形となっており、キチンと文章を読むことが要求される。国語常識については、語彙、慣用句、さらには文学史まで、隅々まで問われる。

試験時間は前期日程が単独で60分あり、後期日程では40分程度が使用可能と想定される。問題の構成から考えて、現代文と国語常識に取り組むには十分な制限時間であり、一つ一つにじっくりと向き合うことができるだろう。

### 【対策】

大まかなことを記すと・・・

学校の教科書に載っている文章は読めるようにしておこう。授業で扱われなかったものに関しても、時間を作って読んでみてほしい。論理展開をしっかりと追いかけてながら、分からない語句が出てきたら、必ず辞書を引き、その場で頭に意味を叩き込んでいこう。

過去問をメインにして演習に取り組もう。加えて、「実践演習現代文 標準」（桐原書店）や、「大学入試 全レベル問題集 現代文 3 私大標準レベル」（旺文社）など、標準的な問題集を1冊は仕上げておきたい。その際にも、出てきた漢字や語句について、分かんなければ、その都度辞書をひいて覚えていくこと。

読解の途中で辞書を引く習慣だけではなく、国語常識をクリアするために、漢字の問題集は1冊仕上げよう。2000程度、意味が記されているものであれば、大概は問題ない。そういう問題集であれば、巻末に四字熟語、ことわざ、慣用句まで載っており、完璧に仕上げることで十分対策になる。

文学史については「国語便覧」を必携したい。数ある文学作品は全て読めるものではないが、著名な作家の有名な出典がコンパクトにまとめて説明されている。明治以降の作家のページは、ことあるごとに読み込んでいこう。

京都橘大学の一般選抜で問われる内容は、例えば、生きていく上で「漢字」から逃れることはできないように、入学のためだけでなく、今後の人生でも役に立つことが多い良問である。これを機に、これから生きていく上での糧を身につけるきっかけとしてほしい。

各設問に対する「具体的な」対策は、この後の授業で・・・

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(2021年度 一般選抜前期 A日程)

① 「私たちの主体が何であるか」を考えることを「主体問題」、もしくは「主体の形而上学」と呼ぶ場合があります。ここでの「主体」とは、「私という人間を『制御』している何らかの存在」という意味です。あなたは、「私をコントロール(制御)しているのは、私に決まっている」と考えるかもしれませんが、そもそもあなたはあなた自身を制御できるのででしょうか。

② そしてそのとき、「制御する」側と、「制御される」側の両方にあなた(ここでは「私」とします)が位置していますが、それは同じものなのでしょうか。自律的な制御(自分で自分を制御するということ)を考えることは不可能ではありませんが、たとえそのように考えても、「制御する」側と「制御される」側の要素が存在します。**あ**自律的に動くロボットの場合、「制御する」側はコンピュータであり、「制御される」側はモーターやセンサーであったりします。

③ では、人間の場合はどうでしょう。「脳」が「制御する」側であって、「身体」が「制御される」側という**A**ではうまく説明できないことは明らかです。なぜなら、私たちは、自分の頭の中に浮かぶ思考ですら、自分で制御していると感じているからです。

④ 私は、私の意思が「私によって駆動されているもの」だと信じて疑いません。多くの人もそうでしょう。「私の脳裏に浮かぶ考えが、私の活動に起因するものであるか否か」ということなど愚問だと、直観的には感じます。

⑤ 今、私の脳裏に発生している思考は、言語によって表現されています。言語以外の方法で表現された私の思考を、私は認識することができません。原稿を書いている私は、キーボードの打ちすぎで右手が少ししびれてきましたが、それも「しびれてきた」と言葉にしてみるまでは気づかなかったことです。そして今「眠いかもしれない」と感じましたが、それも「眠いかもしれない」と脳裏で言葉になった瞬間に「感じた」ことであり、それ以前には「思ってもみなかった」ことだと言えます。

⑥ そんな「私」は、本当に主体者なのでしょうか。「私」の営みは、純粹な意味ですべて「私」に帰属していると言えるのでしょうか。この問題を詳細に検討したのが、ウイットゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein <1889-1951>)です。

⑦ ウイーンに生まれた哲学者ウイットゲンシュタインは、「もしも主体者が私であるならば、私だけの世界というものを考えることができなければならぬ」と考えました。端的に言えば、それは「私の意識の内部の世界のみが〈世界〉そのものであり、それ以外(私の意識の外側)は考える必要がない」ということであり、それを「独我論」と呼びます。そしてさらに、もしも「私の意識の外部を考える必要がない」のであれば、「私だけが理解できる言語」というものが存在するはずだと考えを進め、それを「私的言語」と呼びました。

⑧ 言葉がもっている基本的な機能に「命名」があります。言葉とは、何かに名前を付ける(命名する)ことを基礎としているということです。ここで、「私的言語」が成立するためには、「私的命名」が可能でなくてはならないこととなります。なぜなら、命名は

「言葉を成立させている基本的な機能」であるので、「私的言語」が可能であるとすれば、当然「私的命名」が可能であるはずだからです。

[9] けれども「私的命名」とは、結局のところ「自分だけに通じる何らかの名前を想定すること」です。ワイトゲンシュタインによる「独我論の証明」は、ここで **B**。なぜなら、「私的命名」は不可能なことだからです。たとえば、あなたが見ず知らずの夫婦の間に生まれた子供を見たとき、あなたが生れよう。そのとき、あなたが勝手に（心の中で）「今日からこの子は、私にとってはタロウだ」と考えたとして、それにどのような意味があるでしょうか。(①)

[10] ウイトゲンシュタインは、そのような「私的命名」を「まねごと」でしかないと考えます。命名とは、制度であり、「命名する権利を有した人間」のみが行うことのできる行為です。それは、「命名」とは「制度によつて裏打ちされているもの」だからです。そして「制度」とは、「独我論」的な世界においては存在しえません。

[11] **い**、「制度」とは、「他者」の存在があつて初めて成立する概念だからです。たとえば私が「命名の権利」をもっていたとしても命名するという行為自体が、すでに「他者」を含んでいます。他者に対して何かを伝達するために「命名」する必要があるのです。もしも「私一人の世界」を考へるのであれば、「命名」には何の意味も存在しません。

[12] **う**、ワイトゲンシュタインは、「私的言語」なるものは存在しえないと結論します。「私的言語」が存在しないということは、「独我論」が成立しえないということ、つまり、「私以外の何らかのもの」が「他者」が存在していることを示しています。この「私以外の何らかのもの」が「他者」です。つまり、「私的言語」が成立しえないのは、「他者」が存在していることを意味しています。

[13] 「他者」とは、「私」が認識したものである「他人」とは異なる概念です。私たちは「ある人」をその役割によつて認識しますが、それは、その人を「道具」や「もの」として認識することと同じです。(②) そのように「道具」「もの」「役割」として認識された「ある人」は「他人」です。しかしワイトゲンシュタインのいう「他者」とは、そのような「他人」ではありません。「私の思考」の中にある像としての「他人」ではない。「何らかの存在」が、「私とは別に存在している」ということを示しています。

[14] ウイトゲンシュタインは、「言葉の意味は使用である」と考えました。それは、「言葉に、もしも意味と呼べるような要素がある」とすれば、それは言語制度に従つて言葉を使用するということの中にしかない」ということです。

[15] 私たちは、「ある単語の意味を知っている」と感じています。しかし、辞書的な意味を「知っている」として、そのものの自体を「知っている」としては異なります。辞書を引いてわかるのは、ある単語が別の単語の **C** に置き換え可能であるということだけです。

そして、意味が「単語の置き換えではない」とするならば、私たちは「生命」という言葉の意味を知っているでしょうか、もしくは「魂」という言葉の意味を私たちは知っているでしょうか。

16 ウイトゲンシユタインは、ある概念(を示す単語)を、別の概念によって置き換えて説明することによっては、「意味」は発生しないと指摘します。たとえば、「蛍光灯が光る仕組み」を説明するということを例に、それについて考えてみましょう。

17 蛍光灯の両端に設置されている電極には、電圧がかけられており、その電圧は商用周波数(関東では五〇ヘルツ)で交番(正極と負極が入れ替わること)している。それによって管内には電子が飛び回るようになるが、それらの電子が管の内側の面に衝突する。蛍光灯の内側には、蛍光剤が塗布されていて、この蛍光剤は、電子が衝突すると光を発生する。これは「光電効果」と呼ばれるものであり、これによってアインシュタインがノーベル賞を受賞した研究である。

18 これを読んで、「意味はわかった」「仕組みは理解できた」と考える人があれば、それは誤解に基づくものです。上述の説明の中には「交番電極」「電圧」「ヘルツ」「蛍光剤」「光電効果」「電子の衝突」などのさまざまな概念が含まれており、それらを理解するためには、さらなる説明が必要になります。説明とは、常に「ある概念の、別の概念による置き換え」です。

19 「蛍光灯(が光る仕組み)」という概念を、いろいろな別の概念の組み合わせによって置き換えたのが、上述の説明です。実際この例では、「光る仕組み」を説明しているにもかかわらず、「電子が衝突すると光を発生する」というように、「光る」という概念の説明の中に光を発生する」という概念が含まれてしまっています。(③)

20 私たちが「理解した」と感じるのは、「その説明を適正に使用できる」と感じたことでしょうかありません。端的に言えば、上述の説明で納得できる」のは、その説明の内部で使用されているすべての概念を「適正に使用できる」人のみです。「光電効果」は、非常に厄介な概念ですが、その本質を理解していなくても「適正に使用すること」は可能です。

21 この地球上には、「電波」という単語が **D** 何を意味しているのかを知っている人は存在しません。たとえば私は(電子通信工学専攻です)「電波」を説明することができますが、その **D** の意味など知りません。「重力」でも「空間」でも「光」でもそうです。しかし私は、「電波」「重力」「空間」「光」を、ある文脈の中で適正に使用することができます。

22 **え** 「意味」とは、「言語という制度(ルール)に従った使用」をすることができているということであり、もしも「意味」があるのだとすれば、それは、この「適正な使用」としての「意味」以外を考慮することはできないということです。(④)



23 ②3 そして、「言葉の意味とは使用である」というのは、「言語制度に従って言葉を使用すること」こそが、言葉に命（＝意味）を与えている原因であるということです。（⑤）私たちは「言語という制度」に従って思考し、行動します。私たちはそれに従うほかはない存在です。

（出典 高田明典『「私」のための現代思想』なお、問題作成上、一部省略してある。）

問1 空欄 あくえ に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- あ ① ただし ② たとえば ③ しかし ④ あるいは  
 い ① ときには ② しばしば ③ または ④ なぜなら  
 う ① こうして ② とりわけ ③ 他方 ④ 加えて  
 え ① そればかりか ② そのうえで ③ また ④ つまり

問2 空欄 A D に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- A ① 図表 ② 表 ③ 図式 ④ 算式  
 B ① 迷路から抜け出します ② 完成に近づきます ③ 暗礁に乗り上げます ④ わき道にそれます  
 C ① 羅列 ② 順列 ③ 隊列 ④ 配列  
 D ① 顕然 ② 従来 ③ 眼前 ④ 本来

問3 本文中、次の一文が省略されている。（①）く（⑤）のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

これはあまりに単純な例ですが、どのような場合でも、説明は、必ずどこかの段階で循環します

問4 線「ある概念の、別の概念による置き換え」を行っている例として、最も不適当なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 耳が悪い祖父が会話中、私に「え？今、何と言ったの？」と聞くので、大きな声で前に言ったことを繰り返す。  
 ② 授業中、高校生が「暗中模索ってどういう意味ですか？」と聞くので、教師がたとえ話をふまえて解説する。  
 ③ 小さな妹が「ワニってどんなの？」と聞くので、「これぐらい大きいトカゲみたいなの」と身振りと共に答える。

④ 外国の映画を見ている時に、子どもが「時速六十マイルってどれぐらい？」と聞くので、「時速百キロぐらいのことだよ」と単位を変えて答える。

### 問5

本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。ただし、解答の順序は問わない。

- ① 言葉は言語制度に沿って用いられることが必要であり、そこには科学的な合理性が求められる。
- ② 「魂」や「生命」という言葉の意味は、辞書を引くことで確認することができる。
- ③ 言葉の意味を理解することは、その言葉を適正に使用できることを意味する。
- ④ 私的言語が存在しえないのは、そもそも私というものが存在しないからである。
- ⑤ 「蛍光灯が光る仕組み」を理解するためには、電気通信工学などを勉強し、その本質的な概念を学ぶ必要がある。
- ⑥ ウイトゲンシュタインが独我論を排除したのは、「命名」行為を行うためには他者が不可欠だと結論付けたからだ。

### Ⅲ

次の1～5の説明に当てはまる作品を、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- 1 江戸時代の戯作文芸の流れにのった仮名垣魯文の小説で、弥次郎兵衛・喜多人の二人がロンドンに行くまでの道中記。  
① 『倫敦塔』      ② 『西洋道中膝栗毛』      ③ 『西国立志編』      ④ 『佳人之奇遇』
- 2 幸田露伴の小説で、芸術の永遠性と、それに打ち込む職人の強烈な信念を描いている。  
① 『金閣寺』      ② 『武蔵野』      ③ 『播州平野』      ④ 『五重塔』
- 3 殉死を扱った森鷗外の歴史小説。  
① 『舞姫』      ② 『阿部一族』      ③ 『雁』      ④ 『青年』
- 4 志賀直哉の代表作品で、親子関係、夫婦関係の苦悩を描いている。  
① 『旅愁』      ② 『夜明け前』      ③ 『縮図』      ④ 『暗夜行路』
- 5 三島由紀夫が伊勢湾に浮かぶ小島を舞台に描いた、若い純朴な二人の恋愛小説。  
① 『斜陽』      ② 『潮騒』      ③ 『女坂』      ④ 『縮図』



Ⅳ 次の空欄ア～オに入れるのに最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 彼と野球の話で盛り上がり、アした。

- ① 意気軒昂
- ② 意気消沈
- ③ 意気投合
- ④ 意気衝天

2 彼女は江戸時代の文学についてイ。

- ① 好評を博する
- ② 真価が問われる
- ③ 意を決する
- ④ 造詣が深い

3 彼の持論はウのような荒唐無稽な話だ。

- ① 臍をかむ
- ② 臍で茶を沸かす
- ③ 尻に帆をかける
- ④ 尻に火が付く

4 「君子豹変」とは、もとは「立派な人はエ」という意味であった。

- ① 相手によって態度を変える
- ② 悪を改めてすぐに善に移る
- ③ 突然強硬な態度に出る
- ④ 相手の弱点を容赦なく攻める

5 ①～④の傍線部のうち、誤った漢字を使用しているのはオである。

- ① 就職を斡旋する
- ② 人権の侵害
- ③ 旅費を精算する
- ④ 単刀直入に話を進める

<b>5 4 3 2 1</b>	<b>IV</b>	<b>5 4 3 2 1</b>	<b>III</b>	<b>問 5</b>	<b>問 4</b>	<b>問 3</b>	<b>問 2</b>	<b>問 1</b>	<b>I</b>	<b>【解答】</b>
2 2 2 4 3		2 4 2 4 2		3	1	3	<b>A</b>	<b>あ</b>		
				.			3	2		
							<b>B</b>	<b>い</b>		
							3	4		
							<b>C</b>	<b>う</b>		
							1	1		
							<b>D</b>	<b>え</b>		
							4	4		